

ガジュマルと私

奄美市立赤木名中学校 二年 牧野 まきの 一香 いちか

私の名前は環。私の家の近くには綺麗な海と緑豊かな山がたくさんある。全部私のお気に入り場所だ。なかでも一番のお気に入りの場所は大きなガジュマルの樹だ。全長五十メートル以上にもなる大きな木で一目見てその樹に惹かれた。私はいつも部活が終わると荷物を投げ出してそのガジュマルに登る。休みの日は、ご飯を食べるときや寝るとき以外はガジュマルに登って一日を過ごす。これが私の日課だ。

今日は日曜日。私は、朝ご飯を食べ終わると、いつものようにガジュマルに登って本を読む。この前、本屋に立ち寄ったときにたまたま見つけた「ガジュマルと私」という本。その本を見つけた瞬間、欲しいという衝動が抑えきれず買ってしまったのだ。その本の表紙には、大きなガジュマルとそこで寝ている少女の絵があった。その表紙を見て私は不思議に思った。その少女は私と似ているからだ。不思議に思いながらもその本を読んでみることにした。本を開くと、そこにはいつも自分のところに来て本を読んだり歌を歌ったりする少女に対する、ガ

ジュマルの樹の思いや気持ちを書いてあった。試しに読んでみるとある日の出来事が書いてあった。

「一昨日から台風が来ていて今日になってやっと台風がどっか行った。僕の周りは葉っぱや枝でいっぱいだ。でもそんなとき、いつものあの子が来て一日かけて掃除をしてくれたんだ。嬉しいな。」

そんな文を読んで思い出す。そういえば一ヶ月くらい前に台風が来て私もガジュマルの周りを掃除したな。しかも台風が来てから三日くらい経った後に掃除したような……。不思議に思って、他のページもめくってみる。これも、これも、私がガジュマルと出会ってからの出来事が全てこの本に書いてあったのだ。

「でもなんで……。」

考えても謎は深まるばかり。その時、私はあることに気づいた。この本には続きがあるかのように白紙のページが何枚もあった。それを見て私はもしかしたらと思い、急いで家に戻り鉛筆を取り出す。白紙のページを開いてあることを書く。

「こんにちは、ガジュマルさん。私の名前は環。この場所が私の一番のお気に入りなんだ。よろしくね。」

私は思った。この白紙のページに何かを書いたらガジュマルが返事してくれるんじゃないか。私は少しの期待とワクワクを寄せながら深い眠りについた。

目が覚めると夕方になっていた。さつき書いたページを開く。私は驚いた。本当にガジュマルからの返事が来たのだ。私は嬉しくて他のことも書いてみた。するとスラスラと文字が浮かんできて一つの文になった。

「今日の調子はどう。ガジュマルさん。」

「良い感じ。今日も僕のところに来る。」

「もちろん。」

「本当、嬉しいな、いつでも来てね。待ってるからね。」話が終わると私はその本を持ってすぐガジュマルのところへ行く。本を通じていろんな話をしたり歌を歌ってあげたり、時間はあっという間に過ぎていった。それからという、私たちは何かあったらすぐ本に書いてそのことについて話したり喧嘩もしたり、本当の友達のように仲良くなっていた。この時間が長く続けばいいな。そう思っていた……。

半年ほどたったある日の朝。季節は冬になり、朝は厚着をしていても肌寒いくらい。いつものように起きて朝ご飯を食べていた。そのときだった。どこからかチェンソーの音と大勢の人の足音が聞こえてくる。なんだろう。そう不思議に思っ窓から外の様子をしてみる。そこにはチェンソーを持った大勢の人がガジュマルを囲んで切ろうとしていたのだ。私は裸足のまま急いで家を飛び出し、大声で、

「やめて。」

そう叫んだ。すると一人のおじいちゃんが私の前に出てきて言った。

「実はこの樹は百年以上前からあって、年を取るにつれてどんどん弱ってきているんじゃない。早く切らないと倒れたら大変な事になるんじゃない。だから残念じゃが切らないといけないんじゃない。」

一人のおじいさんが、ガジュマルを切ろうとした。

「お願い切らないで。」

私は必死に抵抗する。

「このガジュマルの樹は私の一番のお気に入り場所なの。毎日学校が終わった後もこのガジュマルの樹に登って本を読んだり歌を歌ったりして過ごしたの。この時間が私にとって一番の楽しみなの。休みの日は一日中このガジュマルの樹と過ごしたこともある。そのくらいガジュマルの樹は私にとってとても大切な。だからお願い。切らないで。」

私は瞳の奥の涙を堪えながら、みんなに訴える。でもおじいちゃんは、

「すまないがもう切ることになっているんじゃない。」

と言ったあと、私に背中を向けてガジュマルの方へと歩き出した。その瞬間みんながチェンソーのエンジンをかけガジュマルの樹を切っていく。私はガジュマルの方へ

と走って行こうとした。けれども手遅れだった。私はガジュマルの樹を守ることが出来なかった。私の思いは届かなかった……。

少しして「ドッシーン。」と地響きがあたり一面に鳴り響く。家の窓から覗いてみると、大きなガジュマルの樹が横に倒れていてトラックで運んでいた。みんなようやく切り終えて喜んでいた。だけど私は悲しみと悔しさでいっぱいだった。窓の隙間から差し込む光でさえ黒く感じていた。ベットに横たわっていると、一筋の光が私の顔に差し込んでいた。

起きたくないと思いつながら無理やり体を起こす。するとそこには、光っている本があった。そう。ガジュマルの樹と楽しい時間を作ってくれたあの本だ。気になりページをめくってみると、そこには私とガジュマルの樹がおしゃべりをしているときや、私が歌を歌っているときの様子が絵になっていたのだ。そして、そのページの隅に小さく「今までありがとう。環と過ごした時間は宝物だよ。」と記されていた。私はその本を持ってガジュマルの樹があった所へと向かう。あんなに大きくて立派だった姿はなくなり、今はその半分にも満たない切り株になっていた。私はそこに座った。本を握りしめて独り言のように呟く。

「私もガジュマルの樹と過ごした時間は宝物だよ。」

私は、希望が溢れ出ているかのように光り輝いている夕日を見つめた。最高の友達と。